

# NEWSLETTER No. 38



## 台風15号・19号被災地域支援を実施中

この秋、東日本を立て続けに襲った三つの台風によって、千葉県は甚大な被害を受け、被災者は台風15号、19号、21号の三重苦を味わいました。台風15号では、強風により、多くの屋根が飛ばされ、全半壊と一部損壊の住宅被害が続出しました。そのひと月以内に関東地方を縦断した19号によって、強風で新たに屋根や壁の一部が落ち、釘と木材で打ち付けていたブルーシートも梁ごと剥がされました。そしてさらに、その2週間以内には台風21号に伴う大雨によって、剥がれた屋根の隙間から雨水が入り込みました。

千葉県では、10月末までに次々と行政によって開設されたボランティアセンターがボランティア受入を停止し始めています。その中でも、私達が現在支援に入っている館山市は、最も住宅被害が大きい地域であるにもかかわらず、この度の台風19号によって広域が被害に遭ったことにより、多くのボランティアが他地域に流れたため、ボランティアが激減しました。

南房総地域では、被災者支援二一ズの中で屋根の修繕に次いで多いのが倒木の伐採処理です。これらの課題は、技術を要する上にリスクもあることから、なかなか一般ボランティアでは担い切れず、未だに社会福祉協議会（社協）内で積み残し課題として残っています。そこで、私達のようなNGOが直接、社協から要請を受けることになり、市内各地の被災者宅でボランティアと共に倒木の伐採処理を行っています。



朝の訪問時、雑然と積まれた倒木



被災した直後の被災地の様子

11月初旬、社協からの要請により、一人暮らしの高齢女性を訪問し、住宅前の倒木処理を行いました。このように、支援要請の多くは、単身高齢者世帯からの依頼です。当日は、ウエスト東京ユニオンチャーチからゼブリ・クリスチャン牧師がご家族や教会員と一緒に応援に駆けつけてくれました。ゼブリ牧師は、ACTフォーラムのメンバーである日本基督教団の元宣教教師です。

館山市では、ボランティアセンターだけでなく、災害ゴミの仮置き場も閉鎖されたため、私達は自力で細かく裁断し、通常の最終処分場に持ち込むことになりました。

伐採後の丸太を引き取ってくれる業者が県内にいないか探して、何件も電話しましたが、業者が要求する条件も合わず、今のところ、最後の引き取り先は見つかっていません。

訪問した翌日、朝から小雨が降る中、館山市内の別の高齢者夫婦からの依頼により、畑と住居敷地で計7本の倒木の伐採処理を行いました。倒木の伐採はとてもチェーンソーでは立ち行かず、重機が必要ですし、それらを操作するオペレーターも必要になります。倒木をそのまま放っておけば、次の災害発生時に、住居を押し倒す危険性があるため、処理を急ぐ必要がありました。そこで、重機を持つ技術系団体の風組関東に応援を頼みました。風組は全国に技術系ボランティアのネットワークを持ち、代表に相談したところ、翌日、千葉県と神奈川県からメンバーを派遣してくれました。



ルーテル教会のボランティア

また、館山市内でも被害が大きかった富崎地区では、次段階の支援を行う前に、どの世帯にどのようなニーズがあるのかを確認しようと、地元NPO「おせっ会」が企画した3日間の全戸調査に私達も参加することにしました。また、2日目の調査には、地元の館山聖アンデレ教会（聖公会）から吉川司祭夫妻と信徒の方が一緒に参加して下さいました。今回の聞き取り調査を通して分かったこととして、想像以上に空家になっている住宅が多いこと、一人暮らしの高齢者世帯が多いこと、被害が大きい家と全く無傷の家が混在していること、多くの住民が住宅のカビ対策を行っていないことでした。先日のTVニュースでも報道されていましたが、この地域でも被災した高齢者が家をあきらめ、土地を離れ始めています。このままでは、コミュニティ崩壊の危険性があり、それを食い止めるためにも、住宅修繕とブルーシート代替策を進めなければなりません。

この全戸調査の結果は、集計後、参加団体間で共有され、今後の対策について話し合われます。CWS Japanでは、地元NPOと連携し、この地区に対して引き続き支援を行っていきます。

(文:プログラム・マネージャー 牧 由希子)



作業に参加した教会ボランティアと依頼主の女性



風組による支援活動の様子



全戸調査の様子

## 仙台防災未来フォーラムで豪雨災害の教訓の発表を行いました！

11月10日には今年二度目となる仙台防災未来フォーラム（仙台市主催）が行われ、CWS Japanは防災・減災日本CSOネットワーク（JCC-DRR）と共催で「豪雨災害の教訓：西日本豪雨の経験から」というセッションを開催しました。

登壇者はCWS Japan理事長である慶応大学のショウラジブ先生、東北大学災害化学国際研究所准教授の泉貴子先生、高知県立大学で災害看護学が専門の神原咲子先生、上智大学客員研究員のアレクサンダージェシカさん、JCC-DRR事務局長の堀内葵さん、そしてCWS Japanからはリサーチ・コーディネーターのダスサンギタ及び小美野が登壇しました。

2015年の国連世界防災会議で仙台防災枠組（2015-2030）が採択されてから、仙台市は15年間毎年マルチセクターのフォーラムを開催すると宣言され、まさにその言葉通り仙台防災未来フォーラムを毎年開催されてきました。CWS Japanはその姿勢や心意気に非常に感銘を受け、国内外の防災教訓の重要な発表の場として位置づけ、登壇を続けています。

「豪雨災害の教訓：西日本豪雨の経験から」のセッションでハイライトされたのは、気候変動の影響によって現在は非常に「不確実性の高い時代」にあるとすること。英語では「New Normal」と表現しますが、今までの経験則が役に立たないような災害の頻発時代に突入したと言われていています。不確実性が高い中で、効果的な災害対応の確実性をどう高め、実践していくのかは重要な課題です。

西日本豪雨では、甚大な被害を受けた岡山県真備町において亡くなった方々の平均年齢は73歳と、多くは高齢者でした。ベッドタウンという土地柄で新しく移住する方も多い中、土地勘がない方へのリスクコミュニケーションの課題や、避難が遅れざるを得ないそれぞれの家庭の事情をどう克服するか、普段の生活の中で頼っているもの（病院やリハビリ施設などを含め）が一瞬にして無くなった時の対応など、学ぶべき教訓はたくさんあります。

また、NPOの役割が増えている中で、災害時には協働体制を組むのが通例となってきてはいるものの、平時からの関係性構築はまだまだ不十分な点や、被災地域の方々がかつだけ復興計画作りに関わっていたのかという各地の災害で指摘される事項もハイライトされました。

登壇者のメッセージとして多かったのは、「自分や家族が被災したら」と自分ごととして考え、発災時のみならず発災から一ヶ月後辺りまで「被災したらどんな生活になって、どんな不便が出てくるか」などを考えて欲しいというものでした。

CWS Japanではこのような教訓を抽出し、発信し、次の災害対応や減災体制が常に向上する循環を目指しています。また、国内のみならず、海外への積極的に発信する事で、国際防災力強化に寄与すると信じています。西日本豪雨の教訓を英語でまとめたレポートはこちら①、②からご覧頂けます。

（文：事務局長 小美野剛）



登壇したセッションの様子

## 新任スタッフの紹介

皆様はじめまして。11月からCWS Japanの一員となりましたライン静香です。約8年余ドイツのデュッセルドルフにて、家族（夫、娘一人）と共に滞在し、今年2019年の10月に日本に戻ってきました。

学校卒業後は主に民間企業で海外営業や人事に係る分野において、仕事の経験を積んでまいりましたが、ドイツでの生活また子育てを通して、後の世代に持続していける社会を残していく活動に従事していきたい、という思いが強くなってきました。こうした思いが実現でき、またこれまでの業務で得た知識やスキルが活かせるような機会を探していたところ、ご縁がありこのたびCWS Japanの活動に携わることになりました。

防災や災害支援については勉強中ですが、かねてよりまちづくりに興味があり、仕事の傍らファシリテーターとして地域の人達とまちづくりのプロジェクトの立ち上げにかかわった経験があります。この経験が、現地の人々のニーズや立場に即した災害復興の支援に少しでもお役にたてれば幸いです。

防災そして災害からのより良い復興に、限りある地球上の資源が有効に使われるにはどうしたらいいか、日々の業務から少しずつ学んでいきたいです。千里の道も一歩から。未知のことばかりですが、未知を知ることが楽しめるようにしていければ、と思っています。これからどうぞよろしくお願いいたします。



（文：プロジェクト・オフィサー ライン静香）